

展覧会のお知らせ

■常設展示

「小川原脩展 馬・犬・おおはくちょう」

小川原脩は画業を通して動物たち、とくに馬・犬・おおはくちょうを題材にしました。馬は初期の頃より登場し、1970年代からは荒々しい犬の群れ、そして大白鳥は優しい群れとして描かれます。また、晩年の作品における動物たちは包み込むような温かな空間を生み出しています。悲哀や寓話、人間社会や自らの境遇が投影された動物たち。小川原脩の世界をお楽しみください。

会期：開催中～7月9日（日）

■企画展示

「小川原脩セレクション 根津夕景—1930's」

1930年代のはじめ、小川原脩は東京・根津八重垣町に下宿し自由闊達な空気を吸いながら上野の東京美術学校（現在の東京藝術大学）で油彩画を学びました。本展では1929年の石膏スケッチからはじまり、美校時代の秀作、そして30年代後半のシュルレアリスム（超現実主義）との出会いに至るまでをクローズアップします。また、「納屋（1933年）」を修復後はじめて展示いたします。

会期：開催中～7月9日（日）

アート・イベントのお知らせ

■土曜サロン

アート探訪〈みて☆きいて〉2

「モディリアーニ～瞳のない肖像画」

20世紀初頭、イタリアからパリに出てきたモディリアーニは、酒と貧困の中から哀愁をたたえた独特の作品を完成させます。その瞳のない肖像画に込められた画家の思いとは。

日時：5月6日（土）14時～15時

お話し：柴 勤（当館館長） 会場：当館映像ルーム 聴講無料

■アート・シネマ館

「夏時間の庭」(2007年/102分/フランス(字幕))

オルセー美術館の全面協力のもとに製作された、三代代にわたる家族の絆を巡る物語。世代や時代が変わっても、永遠に受け継がれる美しい思い出があることを教えてください。

日時：5月13日（土）14時～16時

お話し：柴 勤（当館館長） 会場：当館映像ルーム 聴講無料

■造形活動ワークショップ

「むつ先生と絵あそびしよう！バケツの中は花いっぱい！」

札幌在住の美術家・宮崎むつさんが、楽しい絵あそびをしてくれる人気のワークショップです。

日時：5月13日（土）10時30分～

15時30分（参加無料・申込み不要）

※時間内にいつでも参加できます



▲昨年のワークショップの様子

■道新ミュージアム・コンサート

「羊蹄山麓～縄文の響き」

出演：DJEMP（茂呂剛伸さん：縄文太鼓 / ジャンベ、福田ハジメさん：ピアノ）

日時：5月20日（土）11時～、会場：当館ロビー（無料）

主催：北海道新聞倶知安支局 / 小川原脩記念美術館



小川原脩記念美術館 倶知安風土館

☎ 21-4141

☎ 22-6631

開館時間は9時～17時

（入館は16時30分まで）

5月の休館日

2日、9日、16日、23日、30日

美術館から

「美術館の究極の役割は？」と問われたら、皆さんはどう答えますか。もちろん、正解などはないのですが、私でしたら「作品を次の世代に伝えること」が真っ先に思い浮かびます。そんな当たり前のことと笑われそうですが、作品は生き物です。手をかけなければ、いや手をかけても、月日とともに、その命は少しずつ削り取られてしまいます。私たちが、500年も前の「モナリザ」を鑑賞することができるのは、そこに莫大な手間とお金がかかっているからなのです。当館でも80年以上前に描かれた小川原脩の「納屋」が危うく命を落とすところでしたが、修復によって見事によみがえりました。この機会にじっくりとご覧ください。

館長 柴 勤

海と山と田園とーミュージアムロード情報ー

【クローズアップ】有島記念館特別企画展

「三浦綾子『母』と演出家・守分寿男の仕事」

会期：開催中～10月9日（月・祝）

■有島記念館 0136-44-3245

■木田金次郎美術館 0135-63-2221

■西村計雄記念美術館 0135-71-2525

■荒井記念美術館 0135-63-1111

感動一点 の場

『静物』

1933年頃 小川原 脩 画

小川原脩が東京美術学校時代に描いた油彩画のうち、現存するものは20点あまり。その中には、裸婦像や静物画が数点ずつ含まれる。「静物画」という言葉を西洋美術辞典で引いてみると「花、くだもの、楽器、本、うつわなど、それ自体としては動かないものを描いた絵のこと」と載っている。

壺、甕、皿といったさまざまな陶器、ガラスの瓶、スプーンの軽い金属質と、かげに隠れた鉄瓶の質感。そして木のテーブルに、布きれ。奥にはイーゼルに立てかけられたキャンバスらしきものが見えている。ひとつの絵にこれだけの種類の質感を詰め込んで、修練を積んだのだろう。美校生の貪欲な探究心と吸収しようとする意欲の現れなのか。滑らかで変化に富んだ形を野太い線で力強くとらえ、光の反射を白い絵の具で大胆に描写している。

作品の中で、ひととき私の目を奪うのは、テーブルに敷かれた白い布である。先月紹介した「納屋」（1933年）の男性のシャツを彷彿とさせる。目に映る白色に含まれる鮮やかなブルー、それを描かずにはいられない若者の爽やかさを感じるのである。

文：沼田 絵美（小川原脩記念美術館 学芸員）



—縁起のいい木—

だんだんと気温が上がり、森が色づき始める季節になった。先日、公園を散歩していると、葉がない丸裸の木々に交じり、枯れた葉をつけたままの木が目についた。カシワの木だ。

多くの落葉樹が秋に葉を落とす中、カシワは次の葉が芽吹くまで枯れた葉をつけたままであることが多い。落葉は植物が葉を落とすための特別な層（離層）を枝と葉の間に作ることによって起きる。しかし、カシワは離層の形成速度が遅いので落葉しにくく、春に新芽が伸びるまで枯れ葉が残る。冬も大きな葉が残るため、防風林や防砂林としての価値が高く、特に風の強い海岸部で利用されている。また、葉をつけ続ける様子から「跡継ぎが絶えない」や「繁栄」といった縁起の良い植物とされており、端午の節句に食べられるカシワ餅には、そういった願いが込められている。

ところで、アイヌにはこんな伝説があるそうだ。アイヌが和人に「カシワの葉が落ちる頃に金を返す」といって金を借り、結局春になるまで借金の返済を引き延ばした、というものだ。カシワの性質を利用した、機転の効いた話だ。

風土館の役割は、俱知安町の自然や文化について調査をしたり、資料の収集や蓄積をしたりして、それらを後世に伝えていくことだ。落葉樹でありながら途切れることなく葉をつけ続けるカシワのように、地元の文化を受け継ぎ、伝えていく施設を目指して精進して参りたい。俱知安の風土の素晴らしさや面白さ、そして新たな発見を町民の皆さんと共有していければと思う。

文：小田桐 亮（俱知安風土館 学芸員）

ふる探訪 さと

410回



▲枝に枯葉がついたままのカシワ